

他律的（随伴性）セルフ・エスティームの概念と測定法

山崎勝之*, 横嶋敬行**, 賀屋育子**,
山口悟史***, 内田香奈子*

（キーワード：他律的（随伴性）セルフ・エスティーム，自律的セルフ・エスティーム，非意識，測定，質問紙，潜在連合テスト）

セルフ・エスティームの概念にかかわる近年の動向

セルフ・エスティームの効用に関する否定的研究

セルフ・エスティームは，学校教育界のみならず一般社会においてもその効用の大きさが強調され，我々の健康や適応，それに課題遂行にも好影響を及ぼすと見なされて来た。研究上でも，1960年代に入り立て続けにセルフ・エスティームの概念の精緻化や測定方法が開発されたことを受けて，その後夥しい数の実証的な研究が導かれた。しかしながら，それらの研究はセルフ・エスティームの効用を肯定するものと否定するものが相半ばし，研究が混乱を呈し始めるのにそれほど時間を要しなかった。

そこで，この研究結果の混乱した状況に終止符を打つため，これまでの研究を総合的に分析し，セルフ・エスティームの効果の有無に決着をつけようとした研究が1985年以降実施されるようになって来た。なかでもアメリカ心理学協会（American Psychological Society; 現 Association for Psychological Science）から依頼を受けて Baumeister らがタクス・フォースを設置して行った最終報告（Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003）は衝撃的であった。彼らは方法論上問題の少ない研究を厳選し，それらを精査して出した結論は，幸福感との正の関係を除いて，セルフ・エスティームは暴力，喫煙，飲酒，薬物，それに早期の性行動を低減させていなかったというものであった。つまり，セルフ・エスティームが良好な結果をもたらす見解に否定的な内容で，臨床場面や学校場面でセルフ・エスティームを伸ばす試みの効果も否定することになった。他にも同様に，過去の研究を総合的に精査する研究が行われ（e.g., Mecca, Smelser, & Vasconcellos, 1989），ほぼ同様の結論，あるいは確認されたとしてもセルフ・エスティームの正の効果は極めて低いことが明らかにされた。また，セルフ・エスティームは万能ではなく，正の効果をもつ対象は限定されることを示す研究もある（Emler, 2001）。

この否定的な結果を受けその後の研究はどのようになったかという点，2つの方向が指摘される。1つは，このような否定的な結果をものともせず，これまで通りセルフ・エスティームの研究や教育が継続されていることである。運動にまで高まったセルフ・エスティームを尊重する学校や社会の風潮は消しがたいようで，科学とは無縁のところではセルフ・エスティームの研究や教育が展開されているという印象を受ける。今1つは，セルフ・エスティームにかかわるこのような否定的な結果は，セルフ・エスティームには複数の種類があり，その違いを弁別しないで研究が行われて来たことに問題があり，セルフ・エスティームの概念を再検討するという動きである。この後者の動きはこれまでのセルフ・エスティームの研究を刷新する力があり，次節で詳述したい。

セルフ・エスティームの概念の再考と導出された新規概念

セルフ・エスティームの概念を弁別してとらえる必要が指摘され始めたが，この点については Rosenberg（1965）ではすでに，高いセルフ・エスティームには2種類あるとし，「非常によい（very good）」と「まあ，よい（good enough）」の区別をしていた。「非常によい」高いセルフ・エスティームをもつ者は，外的基準（特に他者）との比較に鋭敏で，その比較において優ることで自分のセルフ・エスティームの高さを確認する。一方，「まあ，よい」高いセルフ・エスティームをもつ者は，自分を平均的な人間ととらえているが，自分が見たとこ

*鳴門教育大学大学院人間形成コース

**兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

***鳴門教育大学大学院学校教育研究科

ろ自分にはかなり満足している。とは言え、自分には不十分さがあることを知っていて、それを改善できることを期待している。そして彼は「まあ、よい」こそが望ましいセルフ・エスティームと考え、自身が開発した質問紙でそのセルフ・エスティームを測定しようとした。ただ、山崎・横嶋・内田（2017）が指摘するように、彼の質問紙は「まあ、よい」のセルフ・エスティームを測定できる尺度にはなっていない。この点に加えて、彼の質問紙がこれまでに最も頻繁に使用されて来たという事実を踏まえて考えると、セルフ・エスティームの研究の混乱をもたらした原因の1つがここにあるのかもしれない。

この Rosenberg のセルフ・エスティームのとらえ方とは独立して、近年の概念再構築は進んでいる。山崎ら（2017）を参考に紹介すると、まず Deci ら（e.g., Deci & Ryan, 1995）は、真のセルフ・エスティーム（true self-esteem）と随伴性セルフ・エスティーム（Contingent Self-Esteem: CSE）の区別を提唱した。彼らによると（Moller, Friedman, & Deci, 2006）、真のセルフ・エスティームが高い者は、自分に関して内発的に満足し、そのセルフ・エスティームは比較的安定している。一方、随伴性セルフ・エスティームは、自分が設定する外的な達成基準に依拠してその高低が決まり、その達成基準はしばしば他者との比較により設定されることになる（Deci & Ryan, 1995）。真のセルフ・エスティームこそが良好な結果をもたらし、随伴性セルフ・エスティームは負の結果をもたらすことが示唆され（Deci & Ryan, 1995）、この弁別なく研究が進めば研究結果に不一致がもたらされることが考えられる。

次に Kernis（2003）は、高いセルフ・エスティームを、脆く高いセルフ・エスティーム（fragile high self-esteem）と安定した（頑健な）高いセルフ・エスティーム（secure high self-esteem）に区別している。前者は、外的要因への随伴によって引き起こされ、随件事象における成功・失敗の影響を強く受ける不安定な性質をもつ。そして脆く高いセルフ・エスティームは、自己を脅かす事象に対して不適応的反応を起こす。一方で、安定した高いセルフ・エスティームは、外的要因へ随伴せず安定し、適応的である。

Deci らと Kernis の概念区分は、Deci らは彼らの自己決定理論（self-determination theory）（e.g., Ryan & Deci, 2000）中のミニ理論の1つである認知評価理論（cognitive evaluation theory）（Ryan & Deci, 2002）に、Kernis が本来性（authenticity）に論拠を置くという理論的背景の違いがあるが、きわめて類似した概念であり、また Rosenberg の区別とも類似性が高い。

これらの新規概念に対して、最近山崎ら（2017）は自律的セルフ・エスティーム（autonomous self-esteem）と他律的セルフ・エスティーム（heteronomous self-esteem）の概念を提起し、セルフ・エスティームを分類している。山崎らは、自分たちが開発した学校で実施する予防教育（鳴門教育大学予防教育科学センター，2013；山崎，2015）で最終的に育成する特性として自律性（autonomy）の概念を提起している（山崎，2013）。自律性は、共通性があっても研究者によって定義の詳細が異なる。山崎は、自己信頼心（self-confidence）、他者信頼心（confidence in others）、内発的動機づけ（intrinsic motivation）がすべてそろった概念として自律性を規定した。自己信頼心は、自分に自信があり、有能であるにとらえる性格であるが、同時に不安と攻撃性が低く、他者信頼心をともなう概念である。他者信頼心は、他者を好意的に見て、他者からも好意的に見られるという安定した感覚（認知と感情）のもとに他者を信頼する性格である。内発的動機づけは Deci らが定義するもの（e.g., Ryan & Deci, 2000）と同じである。この自律性を自己信頼感や有能感の観点から強調して言い換えたのが自律的セルフ・エスティームになる。これに対して他律的セルフ・エスティームは、自律とは反対の「他律」という用語を用いて規定し、上記の3つの要素がすべて低いことがその定義となる。この区分では、自律的セルフ・エスティームが健康で適応的な結果と正に関連し、他律的セルフ・エスティームは負に関連する。山崎らは、この他律的セルフ・エスティームは Deci らの随伴性セルフ・エスティームとほぼ同義であるが¹⁾、自律的セルフ・エスティームと真のセルフ・エスティームは自律性の位置付けや構成要素の結合性が異なるとしているが、最大の違いは測定上の非意識性にあることを強調している。この非意識性の特徴はこれまでのセルフ・エスティームには無かったもので次節で詳述したい。

セルフ・エスティームの測定法の新展開

自律的セルフ・エスティームの非意識性と測定方法としての潜在連合テスト

山崎ら（2017）は、自律的セルフ・エスティームは質問紙で測定することはできず、測定しようとする、それは他律的セルフ・エスティームになることを示している。そもそも性格などは、普段はすべて非意識内にある人の行動に大きな影響を及ぼしている。それが質問紙などによって測定されるときは、その内容が何らかの

かたちで意識上にもって来られる。その場合測定対象としての性格が歪みなく具体的な行動で表現される場合は、記憶からその行動についての情報が抽出され比較的正確に回答が行われる。この点自律的セルフ・エスティームは具体的な行動に落とすことができない抽象性を持ち、あえて具体的な行動で表現しようとする概念内容が歪曲され、抽象的なままで項目を表現しようとする記憶から参照されるのは具体的な行動や結果としての他律的セルフ・エスティームになることが多いとしている。

そこで、非意識にある自律的セルフ・エスティームを意識上にもってくることなく測定する方法が必要になる。この測定方法について横嶋・内山・内田・山崎（2017）は、近年の潜在連合テスト（Implicit Association Test: IAT, Greenwald & Banaji, 1995）の考え方と方法を利用して児童が集団で実施できる紙筆版の IAT を開発した（児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テスト; Paper-and-Pencil Version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children; 紙筆版 SE-IAT-C）。IAT は、指定した対象への態度等の測定を、当該対象と評価内容（良し悪しや好き嫌いなど）との連合を本人が意識できない状況で自動的に測定する方法をとる。この IAT がセルフ・エスティームの測定に利用された例はあるが（e.g., Bosson, Brown, Zeigler-Hill, & Swann, 2003）、児童用で集団で実施可能な IAT はこれまでにはなかった。さらに横嶋らは、児童用の紙筆版の IAT によるセルフ・エスティーム測定方法の開発に当たって、これまでのセルフ・エスティームの IAT 測定方法をいくつかの観点で改善した。その改善は主として、自分以外のカテゴリー語として中性語（あれは、それは）を採用したこと、属性語としての快語と不快語にセルフ・エスティームの高低に関連した形容詞を用いたことであった（表1）。

表1 児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テスト (Paper-and-Pencil Version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children; 横嶋・内山・内田・山崎, 2017) の刺激語 (カテゴリー語と属性語)

カテゴリー語		属性語	
自分	自分以外	快語	不快語
じぶんは	あれは	すきだ	きらいだ
わたしは	それは	すばらしい	くだらない
		じしんがある	ふあんだ
		まんぞくした	やくにたたない

横嶋らは、これまでに作成された IAT によるセルフ・エスティーム測定方法で得られたほとんどの結果が、他者比較に影響されるセルフ・エスティームであることを示唆した。これは随伴性セルフ・エスティームを測定していることを示唆し、小塩・西野・速水（2009）が IAT によるセルフ・エスティームが他者軽視と正の相関を示したこともそのことを示唆している。この点に関連して Karpinski（2004）は、他者語の種類効果を検討し、他者語がマイナスイメージがある語を用いた場合（ヒトラー関連語）の方がプラスイメージがある語（サンタクロース関連語）を用いた場合よりも IAT 得点が高くなることを示し、自分に関する語に対比して置く語の重要性を示唆している。つまり、自分以外のカテゴリー語として他者を指示する言葉を用いていると、随伴性セルフ・エスティームが高い者は他者と不快語との連合が高まるため、全体のセルフ・エスティームの得点が高くなる。また、属性語についても、これまでの IAT によるセルフ・エスティーム測定方法は問題がある。この属性語は、セルフ・エスティームの場合は、セルフ・エスティームの概念を直接的に表現したものにする必要がある。これは、質問紙で、たとえば暴力性の高低を測定するとき、その概念を直接的に表現する質問項目を採用すべきであり、暴力が高まると恐らく間接的に帰結するであろう項目（友だちが少ないなど）を使用すべきではないことに似た注意点である。友だちが少ないことは、何も暴力性が高いことばかりがもたらすことではないからである。従来のセルフ・エスティームを測定する IAT は、セルフ・エスティームに直接関係しない語（うれしい、気持ちいいなど）を使用し、そこで自分との連合で得られた得点がセルフ・エスティームを表現していることは何ら保証されないし、実際に保証されているという構成概念的妥当性は確認されていない。

こうした点を改善して作成された横嶋らの IAT は、信頼性と妥当性も確認されている。とりわけ妥当性は教師評定方法を用いた周到な手続きで確認され、心理測定方法上、とりわけ IAT は妥当性の確認が重要であるだけにきわめて精度が高い測定方法に仕上がっている。

他律的セルフ・エスティームとは何か

横嶋らの測定方法は、自律的セルフ・エスティームが自己報告式の質問紙で測定することができないことから（山崎ら，2017）開発された。それでは、他律的セルフ・エスティームはどうだろうか。他律的セルフ・エスティームの測定方法を検討する前に、他律的セルフ・エスティームの概念を精緻化する必要がある。上述したように、他律的セルフ・エスティームは、Deciらの随伴性セルフ・エスティームと同様の概念である。随伴性セルフ・エスティームは外的な達成基準に依拠して決まり、その達成基準は他者との比較の上に設定されることが多い。この外的な達成基準という点から厳密に言うと、随伴性セルフ・エスティームと他律的セルフ・エスティームにも相違点がある。随伴性セルフ・エスティームの定義からすれば、ここでのセルフ・エスティームは、あくまでも何らかの外的基準に依拠（随伴）して決定されることになる。その外的基準は、他者よりも優ること、先生が設定した合格ライン、親が設定した賞賛に至る行動結果などに加えて、他者の存在とは独立して自分自身で設定した達成基準もある。この最後の、自分が自分で設定した達成基準は他律的セルフ・エスティームの決定要因にはならない。むしろ、自律的セルフ・エスティームの決定要因と言える。他律とは、あくまでも他者により設定されたり、間接的にせよ他者の存在により規定される基準に照らしてセルフ・エスティームが決定されることを意味している。今のところ、随伴性セルフ・エスティームの定義にこの最後の基準を排斥する内容はなく、この点において両セルフ・エスティームは異なることになる。

もし外的な達成基準に依拠して高低が決まるとすると、達成能力の高い者の方が他律的セルフ・エスティームが高くなる可能性があり、こうなると他律的セルフ・エスティームは個人の能力と正に関連することとなる。つまり、他者よりも優れることで他律的セルフ・エスティームが高まるということは、他者よりも能力が高いことになる。もしそうならば、他律的セルフ・エスティームの概念上の独立性が確保できない。

しかし、他律的セルフ・エスティームの高い者は、能力の高低にかかわらず、自分のこのセルフ・エスティームの高さを維持しようとする。このことを可能にするためには、他者よりも優る競争事態へ選択的に身を置き、また重視する競争対象も自身が得意とすることを選ぶことになる。さらに言えば、優れたことの経験がより鮮明に記憶化されることにもなる。つまり、現実の客観的な他者比較の結果ではなく、自らが優るように選択された他者比較での結果を重視することになる。とはいえ、自らが重視し、選択した競争事態で劣る結果も少なくなく、この点から他律的セルフ・エスティームは不安的になる。もっとも、劣った場合には、言い訳や関連する他者への非難など防衛的な反応がとられることが多くなる。また、山崎ら（2017）は自律的セルフ・エスティームの対立概念として他律的セルフ・エスティームを設定しているので、自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけは軒並み低くなる。とりわけ、自律的セルフ・エスティームとの弁別を行う場合は、他者信頼心と内発的動機づけの低さが重要になる。もっとも、能力が高く、他律的セルフ・エスティームが低い場合もよく見かけられ、その場合は、他者よりも遂行結果が良いということに頓着することはない。

また山崎ら（2017）は、自律的セルフ・エスティームが低い場合は、他律的セルフ・エスティームが高いか、自律も他律もどちらのセルフ・エスティームも低い無気力状態であることを示唆したが、同様に、他律的セルフ・エスティームが低い場合は、自律的セルフ・エスティームが高いか無気力状態であることを付記しておく。

他律的セルフ・エスティームは質問紙で測定できるか

それでは、他律的セルフ・エスティームはどのようにして測定できるのだろうか。まず、質問紙を使用する可能性について考えてみたい。

山崎ら（2017）はこの点について、他律的セルフ・エスティームは、明確な行動として質問項目が表現しやすく、社会的望ましさからの歪みもさほど大きくならないと述べている。つまり、他律的セルフ・エスティームは質問紙によって測定できる可能性が高い。そこでまず、他律的セルフ・エスティームとはほぼ同じ概念である随伴性セルフ・エスティームの測定を目指した質問紙の是非を検討したい。

随伴性セルフ・エスティームを測定する質問紙は数少ないが、大別して2種類を指摘することができる。1つは、随伴性セルフ・エスティームを全体としてとらえ、つまり1因子構造（全般的CSE; general CSE）としてとらえる質問紙、今1つは、このセルフ・エスティームを領域別に特定される、つまり多因子構造（領域別CSE; domain-specific CSE）としてとらえる質問紙である。前者では、Paradise & Kernis（1999）による随伴性セルフ・エスティーム尺度（Contingent Self-Esteem Scale: CSES）が代表格でよく使用されている。後者では、どの領域に絞るか（学業面や対人関係面など）によって多様な尺度が開発されているが、広く複数の領域を設定した尺度としては、Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bourvrette（2003）による自己価値の随伴性尺度（Contingencies

of Self-Worth Scales: CSWS) の使用頻度が高い。まずは、この2つの尺度を詳細に検討しながら、他律的（随伴性）セルフ・エスティームの質問紙の在り方を検討したい。

表2 全般的随伴性セルフ・エスティーム質問紙 (Contingent Self-Esteem Scale; Paradise & Kernis, 1999) の質問項目 (原版の英語は, Kernis & Goldman, 2006; 日本語版は, 伊藤・小玉, 2006 より)
 <原版回答選択肢は, 1 (Not at All Like Me) ~ 5 (Very Much Like Me) で, 3 (Neutral) を真ん中に挿入>

-
1. An important measure of my worth is how competently I perform.
 自分の価値を測る重要なものさしは、自分がどれだけ物事を有能に成し遂げるかということにある。
 2. Even in the face of failure, my feelings of self-worth remain unaffected.*
 たとえ失敗に直面しても、自分の自己価値の感覚が揺らいでしまうことはない。
 3. A big determinant of how much I like myself is how well I perform up to the standard that I have set for myself.
 自分で決めた自分の中にある基準でどれだけ物事を達成できたかによって、自分をどれだけ好きでいられるのかが決まる。
 4. My overall feelings about myself are heavily influenced by how much other people like and accept me.
 自分のことが好きかどうかは、他人からどれだけ好かれ、受け入れられるのかにとっても影響を受ける。
 5. If I get along well with somebody, I feel better about myself overall.
 人と仲良くすることが、自分自身をより良い価値ある存在であると感じることに重要だ。
 6. An important measure of my worth is how physically attractive I am.
 自分の価値を測る重要なものさしは、自分の外見がどれだけ魅力的に見えるのかによってかなり影響される。
 7. My overall feelings about myself are heavily influenced by what I believe other people are saying or thinking about me.
 自分のことが好きかどうかは、他人が自分のことをどう言ったりどう思ったりするのかにとっても影響を受ける。
 8. If I am told that I look good, I feel better about myself in general.
 他人から自分の外見を誉められると、自分自身をとっても価値ある存在だと強く感じる。
 9. My feelings of self-worth are basically unaffected when other people treat me badly.*
 他人からひどく扱われたとしても、自分の自己価値の感覚は基本的に影響を受けることはない。
 10. An important measure of my worth is how well I perform up to the standards that other people have set for me.
 自分の価値を測る重要なものさしは、他人から定められた基準でどれだけ物事を達成できるかということにある。
 11. If I know that someone likes me, I do not let it affect how I feel about myself.*
 誰かが自分に好意を抱いていることを知ったとしても、そのことが自分自身に対する感情に影響することはない。
 12. When my actions do not live up to my expectations, it makes me feel dissatisfied with myself.
 自分のしている活動が自分の理想を満たしていないようなとき、自分自身に強い不満を感じる。
 13. Even on a day when I don't look my best, my feelings of self-worth remain unaffected.*
 自分の外見が最高に魅力的だとは思えないような日であっても、自分の自己価値の感覚が強く落ち込んでしまうことはない。
 14. My overall feelings about myself are heavily influenced by how good I look.
 自分のことが好きかどうかは、自分がどれだけ魅力的に見えるのかによってかなり影響される。
 15. Even in the face of rejection, my feelings of self-worth remain unaffected.*
 他者から拒絶されるような目にあっても、自分の自己価値の感覚は影響を受けることはない。
-

*逆転項目

最初に1因子としてのCSESを取り上げ、表2にParadise & Kernis (1999)の英語原典の項目と伊藤・小玉(2006)による日本語版での項目を対比できるように示した。15項目で1因子構造というのは珍しい扱いであるが、因子導出の方法は主成分分析により固有値を算出し、スクリープロットなどから最初の因子が他の因子よりも際だって高い固有値をもつ(ただし、固有値1以上の因子は5つほどある)ことから1因子構造としている(e.g., Neighbors, Larimer, Geisner, & Knee, 2004)。項目数が多いことから α 係数は高く、再検査法によるテスト間の相関も高い(Kernis, 2003)。日本語版では、伊藤・小玉(2006)がこの尺度を翻訳し、同様の方法を用いて因子構造を分析し、最終的に同じ1因子構造の尺度とし、内的整合性の高さも確認している。また、原典では妥当性についても、予測的妥当性を中心に妥当性が確認され(e.g., Kernis, 2003; Patrick, Neighbors, & Knee, 2004)、日本版でも構成概念的妥当性が確認されている。

次に随伴性セルフ・エスティームを多領域、つまり多因子でとらえる尺度であるCrocker et al. (2003)のCSWSの英語原典の項目が表3に示されている。表には、内田(2008)による日本語訳も載せている。ただし、内田(2008)では、原典のうち「神からの愛(God's love)」は省かれているのでその部分は著者らによる日本語訳である。また、内田(2008)では、関係性調和因子(5項目)が新たに挿入され、「家族からのサポート(Family support)」は家族・友人からのサポートとされ、項目文中の「家族」の次に「友人達」が並記されている。この尺度については探索的因子分析は適用されず、確認的因子分析を適用し、その結果、当初の構成どおり7因子(領域)構造がもっとも適合度が高いことが示された。信頼性と妥当性については、内的整合性と再検査での確認を行い、併存的ならびに弁別的妥当性、そして予測的妥当性の高さが確認されている。

この単因子か多因子かという問題は、性格の概念や測定ではよく論議される問題であるが、結論の多くはどちらも想定されるというものである。随伴性セルフ・エスティームで考えると、確かに随伴の対象は個人により異なり多様であることが考えられる。しかし同時に、随伴の対象が異なるとしても何かに随伴して自己の価値を確認するという特性は存在する。多因子による測定方法は、この何かに随伴して自己の価値を確認する、つまり総合的な随伴性セルフ・エスティームを扱うことができない。ただ、領域別の随伴性セルフ・エスティームの高低を問題にして研究を実施する場合はこの領域別の測定が必要になる。事実これまでに、外見や容姿への随伴性(Patrick et al., 2004)、学業成績への随伴性(Schone, Tandler, & Stiensmeier-Peister, 2015)、子どもの成功への随伴性(Wuyts, Vasteenkiste, Soenen, & Assor, 2015)など個別の領域へのセルフ・エスティームの随伴性が検討されている。

表3 自己価値の随伴性尺度(Contingencies of Self-Worth Scale; Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003)の質問項目(日本語訳(因子名含む)は「神からの愛」を除いて内田, 2008より) < 原版回答選択肢は、1 (Strong Disagree) ~ 7 (Strong Agree) で、4 (Neutral) を真ん中に挿入 >

他者からの評価 Others' approval

I don't care what other people think of me.*

他の人たちが私のことをどう考えようと気にしない。

What others think of me has no effect on what I think about myself.*

私が自分自身をどう思うかは、他の人が自分をどう思っているかということに全く影響されない。

I don't care if other people have a negative opinion about me.*

他の人々が私について否定的な意見を持っていたとしても、私は気にしない。

My self-esteem depends on the opinions others hold of me.

私の自尊心は、他の人が私に対して持っている意見によって決まる。

I can't respect myself if others don't respect me.

他の人が私を尊敬しないなら、私は自分を尊敬することができない。

外見的魅力 Appearance

My self-esteem does not depend on whether or not I feel attractive.*

私の自尊心は自分の外見を魅力的と思うかどうかとは関係がない。

My self-esteem is influenced by how attractive I think my face or facial features are.

どれだけ私の顔の特徴に魅力があると思うかによって、自尊心が影響を受ける。

My sense of self-worth suffers whenever I think I don't look good.

自分の見た目がよくないと思うときには、自分の価値が損なわれると感じる。

My self-esteem is unrelated to how I feel about the way my body looks.*

私の自尊心は、私が自分の見た目をどう思うかということとは関係がない。

When I think I look attractive, I feel good about myself.

自分の見た目を魅力的だと思えるときには、自分をいい感じだと思う。

競争性 *Competition*

Doing better than others gives me a sense of self-respect.
課題や技術において他の人よりもうまくやると、自分に価値があると感じる。
Knowing that I am better than others on a task raises my self-esteem.
ある課題において他の人よりも自分がよくできたと知ると、自尊心が上がる。
My self-worth is affected by how well I do when I am competing with others.
他の人よりもよくできることは、私に自尊の気持ちを与えてくれる。
My self-worth is influenced by how well I do on competitive tasks.
私の価値は、他の人と張り合っているときにどれだけうまくやれるかということに影響される。
I feel worthwhile when I perform better than others on a task or skill.
私の価値は、競争的な課題においてどれだけうまくやるかということに影響される。

学業能力 *Academic competence*

My self-esteem is influenced by my academic performance.
私の自尊心は学業成績によって影響される。
I feel better about myself when I know I'm doing well academically.
学業上でうまくやっているとわかると、自分をいい感じだと思う。
Doing well in school gives me a sense of self-respect.
学校でよくできることは、私に自尊の気持ちを与えてくれる。
I feel bad about myself whenever my academic performance is lacking.
学業成績が十分でないときはいつでも、私は自分を駄目だと思う。
My opinion about myself isn't tied to how well I do in school.*
自分をどう思うかは、私が学校でどれだけ優秀であるかということとは結びついていない。

家族からのサポート *Family support***

It is important to my self-respect that I have a family that cares about me.
私を気遣ってくれる家族がいることは、私の自尊心にとって重要である。
When my family members are proud of me, my sense of self-worth increases.
私の家族の人達が私のことを誇りに思ってくれるとき、自分に価値があるという気持ちが増す。
Knowing that my family members love me makes me feel good about myself.
私の家族の人達が私を愛してくれていると知ると、自分をいい感じだと思う。
When I don't feel loved by my family, my self-esteem goes down.
家族に愛されていると感じない時、私の自尊心は下がる。
My self-worth is not influenced by the quality of my relationships with my family members.*
私の価値は家族の人達との関係の質に影響されない。

倫理的であること *Virtue*

My self-esteem depends on whether or not I follow my moral/ethical principles.
私の自尊心は、自分が道徳的・倫理的なきまりに従っているかどうかで決まる。
My self-esteem would suffer if I did something unethical.
もしも非倫理的なことをしたら、自尊心は下がるだろう。
I couldn't respect myself if I didn't live up to a moral code.
もしも私が倫理的なきまりにしたがって生きていないとすれば、私は自分を誇りに思えないだろう。
Whenever I follow my moral principles, my sense of self-respect gets a boost.
自らのモラルにしたがっているときにはいつでも自尊心が高揚する。
Doing something I know is wrong makes me lose my self-respect.
間違っているとわかっていることをやると、自尊心を失う。

神からの愛 *God's love****

My self-esteem goes up when I feel that God loves me.
神から愛されていると思うと、自尊心が高まる。
I feel worthwhile when I have God's love.
神からの愛があると、自分には価値があると感じる。
My self-esteem would suffer if I didn't have God's love.
神からの愛がないと、自尊心は下がるだろう。
My self-worth is based on God's love.
私の価値は、神からの愛に基づいている。
When I think that I'm disobeying God, I feel bad about myself.
神に従順でないと思うと、自分は駄目だと思う。

*逆転項目

**家族からのサポートの訳では、内田（2008）から「友人達」を抜いている。

***「神からの愛」の訳は著書らによる。

また、これも他の性格の概念や測定と同様であるが、全体他律的セルフ・エスティームも特性と状態に区別して測定することが可能である。これは教示を変えたり、質問項目の語尾を変えてたりして測定仕分けることが可能になる。しかし、安定して影響を及ぼすということでは、特性版の作成が急がれよう。

他律的セルフ・エスティームの測定方法の問題と発展

1 因子構造の（全体）他律的セルフ・エスティーム質問紙の再考

最もよく使用されている1因子構造の質問紙が、Paradise & Kernis (1999) による随伴性セルフ・エスティーム尺度であった²⁾。15項目の構成であり、因子の導出過程で固有値の高い因子が入る可能性を削除していることなどが指摘され、真に1因子の構造であるかどうかの検討が必要になっている。この点を直接的に検討したのが Schwinger, Schöne, & Otterpohl (2017) の研究である。いずれもドイツ語版であるが Paradise らの CSE 尺度と Crocker らの CSWS 尺度を多人数に適用してその因子構造を調べている。3つの研究が行われ、研究1では、CSE 尺度を615名の大学生に実施し、半分を探索的因子分析に、残り半分を確認的因子分析に利用している。まず最初の探索的因子分析の方法は主軸法を採用している。これは、Crocker らが使った主成分分析は単にデータのまとまりを見るのに対して、主軸法は背景にある構成概念を探索できるからであった。その結果、4因子の抽出がもっとも説明される分散が大きいことがわかった。それらの4因子は、「他者からの承認 (others' approval)」（6項目）、「自分の外見 (one's appearance)」, 「ソーシャル・サポート (social support)」, 「自己能力 (self-competence)」各3項目であった。確認的因子分析では、1因子構造モデル、階層的モデル、そして関連する4因子モデルを比較した結果、4因子モデルの適合性が最も高かった。研究2では、ドイツ語版の CSWS 尺度（「神からの愛」を除く6領域から成る）を同様に検討し、関連する6因子モデルが1因子モデルや階層的モデルよりも適合度が高くなることを示した。

Schwinger et al. (2017) の結果は、よく使用されている Paradise らの1因子尺度は多因子、つまり多領域の随伴性セルフ・エスティームを測定する尺度であることが示唆されている。この結果を基に、Schwinger et al. (2017) は最後の研究3で、抑うつを予測するのが全体的な随伴性セルフ・エスティームではなくて、いくつかの領域の随伴性セルフ・エスティームであることも明らかにした。しかしこの点については、Paradise らの尺度が多因子からなる以上それをまとめて全体的セルフ・エスティームとして得点化しても、その得点が全体的な随伴性セルフ・エスティームを示しているとは限らないことが指摘される。つまり、自己価値が随伴する領域こそ違えど、何らかの領域に随伴しやすい傾向そのものをとらえる尺度を作成しなければ全体的な随伴性セルフ・エスティームを表現することはできない。つまり、領域別に随伴性セルフ・エスティームを測定する尺度になっている以上、含まれる領域別の随伴性セルフ・エスティームの傾向が健康・適応面に影響する度合いは検討できるが、複数の領域の随伴性セルフ・エスティームの合計得点で表現されるものは全体的セルフ・エスティームの高低を正確に反映することはできない。全体的な随伴性セルフ・エスティームは自己価値が何かに随伴する傾向とすれば、多くの領域で得点が高くなる必要はなく（そのような場合もある）、特定の領域で得点が高くても全体的随伴性セルフ・エスティームの傾向がそれほど高くない場合もあり、このような質問紙ではそれを弁別してとらえることはできない。

こうして領域別の随伴性セルフ・エスティームの質問紙は、一般に人がどのような自己価値の随伴的領域をもつかを推定して多くの領域を考慮して質問紙を作るか、研究上関心ある特定の領域に焦点を当てた質問紙を作るかに分かれるが、いずれも作成は可能であり、現存の質問紙でも利用できる可能性の高い尺度がある。しかし、全体的随伴性質問紙になると、現在利用できる信頼性と妥当性を備えた質問紙は著者らの知る限りない。

そこで実際に全体的随伴性質問紙を作成できる方向性の主要ポイントを抑えながら、質問紙の項目の候補を考えてみたい。ここでは、児童を対象にして質問紙を作成してみる。筆者らは、学校で実施するセルフ・エスティームの育成教育に関心があり、その教育効果の検証に使用するための尺度の開発を急いでいることがその理由である。まず特に注意することは、随伴性セルフ・エスティームの高い児童は関与したい他者との競争事態は様々なので、特定の事態（算数がよくできる、走るのが速いなど）を表す項目を採用しないことである。こうなると、自分のよいところ、自慢できること、自信があること、得意なことなどの表現が候補に挙がり、それらが他者より（友だち）より多いかどうかを聞き、「いつも」あるいは「かならず」多いなどと極端な聞き方はしない。結果があるものは、その成否は変動することになる。ただ、友だちに負けたくない、勝ちたいなどの気持ちは強め（いつも、ぜったいになど）に尋ねることができる。また、それらの気持ちは安定して持続することができる。

表4 他律的セルフ・エスティームを測定する質問紙で候補に上る質問項目

1. わたし（ぼく）は、友だちよりも、よいところを多くもっている。
2. わたし（ぼく）は、友だちと競争するときは、いつも勝ちたいと思う。
3. わたし（ぼく）は、友だちとくらべて、すごいところが多い。
4. わたし（ぼく）は、友だちに、じまんでることが多い。
5. わたし（ぼく）は、友だちには、ぜったいに負けたくない。
6. わたし（ぼく）は、友だちとくらべて、自信があることが多い。
7. わたし（ぼく）は、友だちよりもよくできたことを、親や他の人に話すだろう。
8. わたし（ぼく）は、友だちよりも、得意なことが多い。

表5 他律的セルフ・エスティームの妥当性検討のための教師ノミネート評定（小学校の場合）

<教示>

下に、児童の特徴が書かれています。

下の特徴に「最も当てはまる児童」と「最も当てはまらない児童」をお書きください。

担任をされているクラスの中からそれぞれ3名*を選び、当てはまる順番または当てはまらない順番に、児童の出席番号をお書きください（男女は問いません）。

なお順番は、あまり考えすぎずに、先生が最初に思われたとおりにお書きください。

<児童の特徴>

競争意識が高く、他の児童の出来や結果が気になる。

*選ぶ人数はクラスの規模により異なり、クラスの構成人数の1割程度が望ましい。

そこで、候補に挙がった項目が表4にある。これらの項目の作成にあたっては既存の質問紙（Rosenbergのものなど）を参照しようとしたが、結局のところ、上記の考察や条件を考慮すると既存の質問紙は参考にならず、心理学を専門とし、他律的セルフ・エスティームの概念に精通した複数の研究者が内容的妥当性を付与できるように作成した候補項目である。回答選択はリカート法を採用し、“まったくあてはまらない”～“とてもよくあてはまる”の4件での回答が採用できる。

この質問紙をもって信頼性の検討に入ることができるが、問題は妥当性である。心理学における構成概念を測定する質問紙は妥当性の付与が最大課題となるが、この妥当性の検討が極めて難しい。セルフ・エスティームの質問紙も他の質問紙との併存的妥当性や何らかの基準関連妥当性の観点から妥当性を測定した試みが多いが、その場合の基準となる対象の妥当性そのもの、あるいはその対象との関連が明確でない場合が多く、妥当性があることの証明はほぼできていない。妥当性の検討は測定しようとする概念に直接的に関連する検討が望まれるが、児童の場合、受け持ちの児童のことをよく知るクラス担任が評定を行うという方向での妥当性の検討が可能になる。日本の小学校ではクラス担任制を強いているので、半年もたてば担任教師は受け持ちの子どもの特性をかなり正確に把握している場合が多い。

そこで、担任教師の評定により妥当性の検討を行う方法を考案した。この場合重要なことは、測定概念を表す平易な文表現の作成である。できれば1つの文を作成し、その特徴に最も当てはまる児童と最も当てはまらない児童をクラスの中から選んでもらう方法をとりたい。そこで、質問項目の作成時と同様に、この概念に精通した複数人の研究者により導出された一文が、「競争意識が高く、他の児童の出来や結果が気になる」とした。各担任が選ぶ児童の人数はクラスの大きさによって異なるが、当てはまる児童と当てはまらない児童をクラス人数の1割ほどにすることが推奨される（表5参照）。

なお現時点で、上記の方針を採用した全体他律的セルフ・エスティーム質問紙の作成が完了していること（賀屋・山口・横嶋・内田・山崎、印刷中）を付記しておく。

多因子構造（領域別）の他律的セルフ・エスティーム質問紙の再考

さて、1因子構造の質問紙の考察に続き、多因子構造（領域別）の他律的セルフ・エスティーム質問紙について再考したい。多因子の場合は、設定する領域がまず重要になる。人により重視する領域が異なるが、一般的に

重視される可能性の高い領域が設定される。また、学業面など研究上興味ある領域だけをあらかじめ限定して設定することもできる。一般的に重視される可能性がある領域の選定は、測定方法の開発にかかわる研究者との協議でもよいし、対象集団等にあらかじめ重視する領域を尋ねて調査することもできる。

そこで、ここでは領域別の他律的セルフ・エスティーム質問紙を作成する一つの方向を示唆したい。まず、教示等で回答すべき領域を限定する（勉強面や運動面など）。そして、児童用であるが、表4にあるような項目を用いてその領域での他律的セルフ・エスティームの高さを共通した項目で問う。要するに、表4で示唆した全体他律的セルフ・エスティーム質問紙の項目を領域別に設定すればよいことになる。この方向で質問紙を作成する場合は、調べる領域を決定する（領域を広く調べたいのか、特定の領域を調べたいのかも考慮する）、そして、各領域で共通した質問項目を考えるという手順で作成が進行することになる。もちろん、各質問項目の下で領域を設定することもできる。領域の数によっては、表4の項目をすべて使用するのは回答者への負担が大きくなる場合も考えられ、表4の項目を精選することもできよう。

この方向での作成はこれまでの随伴性セルフ・エスティーム質問紙と異なる特徴がいくつかある。まず、すべての領域で質問項目が同じになり、項目内容の違いから生まれる回答の相違により領域間の比較を行うことができないという問題が解消される。また、表4の項目はいずれも平易であり、成人での質問紙に見られるように(e.g., Croker et al., 2003)、項目の中に、「セルフ・エスティーム」や「自分の価値」など成人でも解釈が人により異なるような抽象的な言葉は用いられていない。その他、全体他律的セルフ・エスティーム質問紙の作成時に指摘した利点がこの質問紙にはある。

子ども用の他律的セルフ・エスティーム質問紙の作成を広領域で作成する場合は、学業面、運動面、芸術面、容姿面などが領域の候補として挙がる。またこの質問紙では、本論文で述べたように、領域ごとの得点のみが意味をもつことになり、領域を総合する得点を出すことにはほとんど意味がないことに留意する必要がある。特性でも状態でもこの質問紙の作成方向は適用できるが、先述したとおり、特性版の作成から始めるのがよいだろう。最後に、妥当性の検討については、1因子構造の質問紙で説明した方法を採用することができる。

他律的セルフ・エスティームは IAT で測定できるか

山崎ら（2017）は、性格などの特性はすべて、普段は非意識においてヒトの行動に影響を及ぼすことを示している。この特性を質問紙で測定しようとする場合、何らかのかたちで意識のスポットが当てられることになるが、そのスポットが歪みなく当てられる場合と当てられない場合があり、自律的セルフ・エスティームは当てられず、他律的セルフ・エスティームはある程度当てられるということであった（山崎ら、2017）。いずれにしても、このように考えると、すべての性格特性は少なくとも非意識において測定できれば、その特徴が歪み少なく分かることになり、当然他律的セルフ・エスティームも非意識で測定することが考えられる。

この場合、実施や採点の容易性や客観性を考慮すると、やはり候補に上るのは IAT になる。そして横嶋ら（2017）による自律的セルフ・エスティームを測定する IAT を参考にすることができる。横嶋らの IAT で使用された刺激語は表1に示したとおりである。他律的セルフ・エスティームの場合、これらの刺激語の選定が重要になり、他の実施方法などは横嶋らのものをそのまま使用することができる。刺激語では、まず自分以外のカテゴリー語を変える必要があり、他者としての「ともだち」、「なかま」が考えられる（表6）。属性語はこのままでもよい。得点化では、「自分・肯定語－他者・否定語」の課題での正答遂行量から「自分・否定語－他者・肯定語」の課題での正答遂行量を引くことで他律的セルフ・エスティーム得点が算出されることになる。

表6 紙筆版の他律的セルフ・エスティームの刺激語の候補

カテゴリー語		属性語	
自分	自分以外	快語	不快語
じぶんは	ともだち	すきだ	きらいだ
わたしは	なかま	すばらしい	くだらない
		じしんがある	ふあんだ
		まんぞくした	やくにたたない

今後の展望

これまでに述べて来たことから、セルフ・エスティームは自律的と他律的に分けて考える必要があること、自律的セルフ・エスティームは非意識で測定する必要があること、他律的セルフ・エスティームは非意識に加えて意識上でも測定することができることが明らかにされた。

本論文で指摘したように、他律的セルフ・エスティームの測定方法は未だ不十分で、特に非意識での測定方法の開発が待たれている。その開発が完了すれば両セルフ・エスティームの健康や適応それに遂行への効果の比較検討を開始することができる。その場合、実際のセルフ・エスティームの特徴以外は対等の条件で比較する必要がある。他律的セルフ・エスティームを質問紙で測定した場合は、IATで測定した場合と比べて少なくとも社会的望ましさの混入の度合いが異なるので、IAT測定による自律的セルフ・エスティームと質問紙測定による他律的セルフ・エスティームを比較することは望ましくない。そこで、両者を対等に比較するためには、どちらもIATによって測定されたセルフ・エスティームを採用する必要がある。

近年、インプリシット (implicit) とエクスプリシット (explicit) ・セルフ・エスティームを比較する研究が行われているが (e.g., Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Brone, & Correll, 2003; Zeigler-Hill, 2006), 両者でセルフ・エスティームそのものの特徴以外からの影響が測定方法の違いから混入するのでその意味は見いだせない。もっともそれ以前に、インプリシットとエクスプリシットのセルフ・エスティーム自体の測定項目や測定刺激が異質であり、そもそも両セルフ・エスティームが対等に測定されているとは考えられない。

このような点を考慮した上で、自律的セルフ・エスティームと他律的セルフ・エスティームの効果比較の研究が今後の研究として指摘される。本論文でこれまでに説明して来たように、その概念の成り立ちや特徴から、自律的セルフ・エスティームの方が健康で適応的な状態をもたらす、また遂行量も高いことが予想される。学校現場では、子どもに健康や適応、それに学業上の問題があれば、セルフ・エスティーム（ほぼ同じ意味で「自己肯定感」と言及される場合も多い）の低さがその主要原因として指摘されることが多かった。そこで、セルフ・エスティームを育成する教育が行われることが多いのであるが、その育成内容はもとより、その効果評価として使用されるセルフ・エスティームが質問紙で測定されていることから、それらは問題のある他律的セルフ・エスティームの特徴が強いことが予想される。つまり、予期せず、問題のあるセルフ・エスティームを育成しようとしている学校教育の在り方が示唆される。こうして、セルフ・エスティームの学校における位置付けが大きいだけに、自律的セルフ・エスティームの育成や測定をみざす方向で教育を転換する必要がある。

最近この自律的セルフ・エスティームを育成する学校教育プログラムが開発され、すでに実践されている。それは「自己信頼心（自信）の育成 (development of self-confidence)」と呼ばれるプログラムで (Yamasaki, Murakami, Yokoshima, & Uchida, 2015), 「いのちと友情の学校予防教育」(Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship: TOP SELF; 鳴門教育大学予防教育科学センター, 2013; 山崎, 2015) と総称されるユニバーサル予防教育プログラムの1つである。このプログラムは自律的セルフ・エスティームの発達過程を考慮し、また非意識で発生する情動の十分な喚起と、その喚起下での教育目標としての自律的セルフ・エスティームの構成要素の達成を目指し、学習された自律的セルフ・エスティームの構成要素を同時に喚起された情動や感情³⁾とともに全体として記憶化させるという理論的背景と方法論をもつ (Uchida, Yamaaki, & Sasaki, 2014)⁴⁾。当初は、自律的セルフ・エスティームの測定方法が開発されていなかったことから、教育による自律的セルフ・エスティームの育成効果を直接的に測定する試みはなかったが、測定方法の開発とあいまってその効果を直接検討し、その効果が確認され始めている (横嶋・賀屋・内田・山崎, 印刷中)。横嶋ら (印刷中) では、自律的セルフ・エスティームを自らの開発した、IATにより集団でインプリシット・セルフ・エスティームを測定する紙筆版 SE-IAT-C を教育前後で適用してその教育効果を確認した。また、同時に Rosenberg (1965) の児童版の質問紙 (横嶋・内山・内田・山崎, 2016) を適用し、その得点には教育による変化がないことも示している。

こうして、自律的セルフ・エスティームに特化した学校予防教育が開発され、自律的セルフ・エスティームの測定方法も用意された今、学校におけるこれまでのセルフ・エスティーム育成教育を刷新して実施できる条件が整ったと言える。この条件を前面に出した教育を行うには、まずは学校現場へセルフ・エスティームの概念ならびにその教育のあり方の再教育を行うことが急がれる。最近、自律的セルフ・エスティームの概念、測定方法、教育について平易に紹介された書籍 (山崎, 2017) が出版されたことはこの再教育を促進させることが期待される。そして、学校側が新規概念と教育を理解した後に初めて、子どもの健康と適応に寄与するセルフ・エスティーム教育を軌道に乗せることができよう。

注

- 1) 本研究では、「他律的セルフ・エスティーム」と「随伴性セルフ・エスティーム」の用語が混在して用いられるが、原則的には、これまでの、随伴性セルフ・エスティームの記述をもって進める研究を参照する場合はその語を、他の場合は可能な限り、他律的セルフ・エスティームの語を用いている。しかしいずれの場合も、意味することはほぼ同じである。
- 2) 他に日本では、1因子（全体的）随伴性セルフ・エスティームの測定に関連した質問紙として2つ挙げておきたい。1つは、随伴性セルフ・エスティームではないが、伊藤・川崎・小玉（2011）が小塩（2004）による自己愛人格目録短縮版の下位尺度である優越感・有能感を随伴性セルフ・エスティームの測定方法として利用したもの。しかし、内容を見るかぎりこの尺度は正に優越感や有能感を測定するものであり、随伴性セルフ・エスティームの概念と比較して自分の能力の高さを誇る内容が強調され、この点で概念の違いが大きく、随伴性セルフ・エスティームの測定方法とはならない。また近藤（2010）は、セルフ・エスティームを基本的自尊感情と社会的自尊感情に大別し、このうち社会的自尊感情が随伴性セルフ・エスティームに類似した概念をもつ。そして、この2つの概念を測定する児童・生徒用の質問紙を作成しているが、著者らが見た限り、因子的妥当性、信頼性、妥当性は十分ではなく、特に順転と逆転の項目同士の類似性が極めて高いことなど項目自体にも気になることが少なくない。
- 3) Damasio（1994, 2003）によれば、情動（emotion）は、生じた当初は意識に上らない身体反応（皮膚電気反応の生起など）であり、感情（feeling）は、その情動がまとまって強く生起し、意識に上ったときに特定の感情名称（怒った、悲しいなど）をもって指示できるようになったものである。
- 4) 自己信頼心（自信）の育成プログラムの開発当初は、自律的セルフ・エスティームの概念は導出されていなかった。しかし、このプログラムはTOP SELFの大目標である自律性を育成することに寄与することを目指して作成されたことからわかるように、このプログラムでいう自己信頼心（自信）とは自律的セルフ・エスティームに他ならない。そこで、本論文では自律的セルフ・エスティームの概念を取り入れ、この教育を説明している。なお、現在、このプログラムを自律的セルフ・エスティームの育成にさらに適した教育目標へ改訂を済ませ（山崎・内田・横嶋・賀屋・道下、印刷中）、教育方法の改訂を開始している。

引用文献

- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1–44.
- Bosson, J. K., Brown, R. P., Zeigler-Hill, V., & Swann, Jr., W. B. (2003). Self-enhancement tendencies among people with high explicit self-esteem: The moderating role of implicit self-esteem. *Self and Identity*, 2, 169–187.
- Crocker, J., Luhtanen, R. K., Cooper, M. L., & Bouvrette, A. (2003). Contingencies of self-worth in college students: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 894–908.
- Damasio, A. R. (1994). *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Putnam.
- Damasio, A. R. (2003). *Looking for Spinoza: Joy, sorrow and the feeling brain*. New York: Harcourt.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In Kernis, M. H. (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 31–49). New York: Plenum Press.
- Emler, N. (2001). *Self-esteem: The costs and causes of low self-worth*. London: Joseph Rowntree Foundation.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4–27.
- 伊藤正哉・小玉正博（2006）. 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討 – 本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して – 教育心理学研究, 54, 222–232.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Brwone, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 969–978.

- Karpinski, A. (2004). Measuring self-esteem using the implicit association test: The role of the other. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 22–34.
- 賀屋育子・山口悟史・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之（印刷中）. 児童用の他律的（随伴性）セルフ・エスティーム尺度の開発 – 尺度の信頼性と妥当性の検討, そして教育への適用の考察 – 教育実践学論集, 19.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1–26.
- Kernis, M. H., Lakey, C. E., & Heppner, W. L. (2008). Secure versus fragile high self-esteem as a predictor of verbal defensiveness: Converging findings across three different markers. *Journal of Personality*, 76, 477–512.
- 近藤 卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学 金子書房
- Mecca, A. M., Smelser, N. J., & Vasconcellos, J. (Eds.) (1989). *The social importance of self-esteem*. Berkeley: University of California Press.
- Moller, A. C., Friedman, R., & Deci, E. L. (2006). A self-determination theory perspective on the interpersonal and intrapersonal aspects of self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Self-esteem: Issues and answers* (pp. 188–194). New York: Psychology Press.
- 鳴門教育大学予防教育科学センター（編）(2013). 予防教育科学に基づく「新しい学校予防教育」(第2版) 鳴門教育大学
- Neighbors, C., Larimer, M. E., Geisner, I. M., & Knee, C. R. (2004). Feeling controlled and drinking motives among college students: Contingent self-esteem as a mediator. *Self and Identity*, 3, 207–224.
- 小塩真司・西野拓郎・速水敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250–260.
- Paradise, A. W., & Kernis, M. H. (1999). *Development of the Contingent Self-Esteem Scale*. Unpublished data, University of Georgia.
- Patrick, H., Neighbors, C., & Knee, C. R. (2004). Appearance-related social comparisons: The role of contingent self-esteem and self-perceptions of attractiveness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 515–528.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68–78.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of self-determination theory: An organismic dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.
- Schöne, C., Tandler, S. S., & Stiensmeier-Pelster, J. (2015). Contingent self-esteem and vulnerability to depression: Academic contingent self-esteem predicts depressive symptoms in students. *Frontiers in Psychology*, 6, 1–13.
- Schwinger, M., Schöne, C., & Otterpohl, N. (2017). Structure of contingent self-esteem: Global, domain-specific, or hierarchical construct? *European Journal of Psychological Assessment*, 33, 388–397.
- 内田由紀子 (2008). 日本文化における自己価値の随伴性 – 日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検討 – 心理学研究, 79, 250–256.
- Uchida, K., Yamasaki, K., & Megumi, S. (2014). Attractive, regularly-implementable universal prevention education program for health and adjustment in schools: An Innovation from Japan. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 116, 754–764
- Wuyts, D., Vansteenkiste, M., Soenens, B., & Assor, A. (2015). An examination of the dynamics involved in parental child-invested contingent self-esteem. *Parenting: Science and Practice*, 15, 55–74.
- 山崎勝之 (2015). 「学校予防教育」とは何か 鳴門教育大学
- 山崎勝之 (2017). 自尊感情革命 – なぜ、学校や社会は「自尊感情」がそんなに好きなのか? – 福村出版

- Yamasaki, K., Murakami, Y., Yokoshima, T., & Uchida, K. (2015). Effectiveness of a school-based universal prevention program for enhancing self-confidence: Considering the extended effects associated with achievement of the main purposes of the program. *International Journal of Applied Psychology*, 5, 152–159.
- 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子 (2017). 「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築 –セルフ・エスティーム研究刷新への黎明– 鳴門教育大学研究紀要, 32, 1–19.
- 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・賀屋育子・道下直矢 (印刷中). 「自律的セルフ・エスティーム」を育成するユニバーサル予防教育の教育目標の確立と授業方法の開発方針 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32.
- 横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之 (印刷中). ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心(自信)の育成」プログラムの効果 –児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストを用いた教育効果の検討– 学校保健研究, 60.
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2016). 児童用の Rosenberg 自尊感情尺度の再作成 –項目の修正と教師による児童評定を用いた妥当性の検討– 日本教育心理学会第58回大会論文集, p. 650.
- 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2017). 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発 –信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討– 教育実践学論集, 18, 1–13.
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability? *Journal of Personality*, 74, 119–143.

The concept and measuring method of heteronomous (contingent) self-esteem

YAMASAKI Katsuyuki*, YOKOSHIMA Takayuki**, KAYA Ikuko**,
YAMAGUCHI Satoshi***, and UCHIDA Kanako*

(Keywords: heteronomous self-esteem, contingent self-esteem, autonomy, nonconsciousness,
measurement, implicit psychological characteristics)

Low self-esteem has been treated as one of the leading causes of maladaptive behaviors in schools and communities. However, in recent years, more and more studies have been denying the benefits of self-esteem, which lead to the reconsideration of the previous concept and measuring method. Especially, Yamasaki et al. (2017) developed a new concept termed “autonomous and heteronomous (contingent) self-esteem” after referring the newly developed concepts by Deci and others’ and Kernis’ studies. They revealed that the autonomous self-esteem is beneficial for health, adjustment, and performance, while heteronomous one is unbeneficial. Moreover, they indicated that autonomous self-esteem is unable to be consciously measured utilizing self-reports, and then developed a new implicit association test (IAT) termed “Paper-and-Pencil Version of SE-IAT-C” for a group of children at schools. Meanwhile, they suggested that heteronomous self-esteem is able to be measured both consciously and nonconsciously. After considering Yamasaki et al.’s notions, the current paper scrutinized the concept and measuring methods of the heteronomous self-esteem reviewing the past research. In doing so, we focused on how we can develop a questionnaire and an IAT for heteronomous self-esteem. Finally, we discussed how we utilize autonomous and heteronomous self-esteem measures in cultivating autonomous self-esteem with universal prevention programs.

*Department of Human Development, Naruto University of Education

**Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

***Graduate School of School Education, Naruto University of Education